「当たり前」の日常の中に

　　　　　　　　　　　　　高野町立高野山中学校　三年　工藤　龍源

　「ああ、退屈だな。何か楽しい事ないかな。」

　朝起きたら登校し、放課後は部活動。帰宅したら慌てて塾に行き、終わると、夕食、宿題、入浴を済ませ、後は、僕の自由な時間だ。このように繰り返される日常の中で、何が楽しくて、「幸せ」とは何だろうと思うことがよくある。

　そんな時だった。報道番組の特集で、海外のある国の様子を見た。その様子は、僕の疑問を見事に解決してくれた。一つ目は、「水を汲みに行く少女」の話だ。

　「水を汲みに行く？」僕だったら、台所の蛇口をひねればすぐに水が出てくる。それも限りなく・・・。しかし、少女は、毎日三キロメートルの道のりを、何度も何度も行き来して、井戸から水を汲み上げていた。水を汲みに行くことは、少女の仕事なのである。しかし、仕事はそれだけではない。洗濯や料理、田畑を耕したりして、週に百時間以上も働いているそうだ。では、僕の仕事は何だろう。お風呂洗いや布団引き、部屋の掃除、そして、一番大切なのは、勉強である。でも、どれもこれも僕は、中途半端である。たまに、さぼったりすることもあり、両親はあきれている。

「疲れた時ぐらい、さぼっても良いではないか。」

と、僕は言っていたが、少女の事実を知り、恥ずかしい気持ちになった。しかし、少女は、さぼろうとしたことがあるのだろうか。さぼれば生きていけなくなる。危機迫る生活が、そこでは待っているのだ。この事を知った時、僕は、日頃のありがたさを改めて実感した。そして、こんなに「当たり前」の毎日が、当たり前でないことに初めて気付いた。

　毎日の食事は作ってもらい、自分のやりたいことはいつでもできる。そして、欲しい物があるとすぐ手に入り、さらに、誕生日やクリスマスといった、お祝いの日は、プレゼントをもらったりする。このようにして、僕は十四年間生きてきた。これを、不思議に思ったりしたことはない。下手したら、プレゼントに対して、

「ええ・・・。これ何？」

と文句を言った時もあった。僕は、なんてみっともないのだろうと、自分自身を恥ずかしく思った。もっと、もっと感謝するべきだったのだ。さらに、僕も、人に何か与えられるような人になりたいと強く思った。

　また、二つ目は、「一冊の教科書」の話である。日本では、一人ひとりに教科書が、当たり前のように配布される。ところが、ボロボロの一冊の教科書を、十人ほどで使っている海外の子ども達の様子を見た。僕のクラスは十五人。もし、十五人で一冊の教科書を見て勉強するとしたら、どんな感じなのだろう。多分、充実した勉強はできないのではないかと思う。しかし、その子ども達は、目をキラキラと輝かせながら、授業に取り組んでいた。「恵まれた環境」とは言えない中で、いきいきと楽しそうに勉強している。「精一杯生きる姿」に圧倒された。僕は、恵まれているのに、精一杯やろうとしているのだろうか。無駄な時間ばかり費やしていることを、今さらながら知る。「恥ずかしい」を通りこし、申し訳なく感じてきた。

　僕は、海外の国の様子に目を向けることを通して、自分にないものを求めるだけではなく、今あるたくさんの「当たり前」に感謝をして、生きていかなければならないことに気付いた。だから、同じ一日でも、考え方や使い方によって、全く違う一日になるということを受け止め、自分の時間を大切にして、何事にも精一杯取り組んでいきたいと強く思う。

　「当たり前」の日常。その何気ないように思える一つ一つの中に、本当の「幸せ」が、きっとあるのだから・・・。